

第 27 回香川県子ども・子育て支援会議 会議記録

1 開催日時 令和 7 年 1 月 30 日（木） 10 時 00 分～11 時 50 分

2 開催場所 香川県社会福祉総合センター 7 階 特別会議室

3 出席委員 入谷委員、植田委員、岡本委員、金倉委員、金子委員、川中委員、白石委員、
紫和委員、杉本委員、為定委員、中橋委員、西岡委員、前田委員、吉村委員、
渡邊委員

計 15 名

（欠席 小柳委員、白井委員、谷川委員、長谷川委員、山下委員）

20 名中 15 名が出席し定足数を満たしており、本会議は有効に成立。

4 傍聴者 1 名（定員 10 名）

5 議事

（1）第 2 期香川県健やか子ども支援計画の変更について

（事務局） （第 2 期香川県健やか子ども支援計画の変更について、資料 1～3 に基づき説明。）

（会長） 本計画については、11 月の会議において、皆さまからいただいたご意見を反映したもので、
修正している。

（委員） こども基本法では、「こども」の字が全てひらがなになっているが、この計画の本文中には、
漢字の「子ども」が多くあり、一部、「こども」がひらがなになっているところもあり、その
説明がないので教えてほしい。また、他の自治体でも、自治体によって、ひらがな「こども」
と漢字「子ども」があり、県としてどのように考えているのか教えてほしい。

（事務局） まず、この第 2 期の計画については、前回の会議でも少し説明させていただいたが、本計画
を 1 年延長し、来年度しっかり議論していくということで、例えば、理念のところなどは、ま
た次の段階で考えていくことにはなるのだが、基本的には、「香川県第 2 期健やか子ども支援
計画」の子どもの「子」は漢字である。ただ、文面中に、ひらがな「こども」が出てくるのは、
法律を引用したり、国が「こども」を使っているところ、例えば、こども基本法や、こども大
綱などは、基本的にはそのまま使っており、標記が入り混じった状態になっている。

（会長） 関連して、「こども」以外にも、「かがわ」をひらがなを使う場合もある。国が出してる「令
和 6 年版こども白書」も、基本的に法律を引用しているものや、こども家庭庁など、国がひら
がなで統一しているものは、基本、合わせていて、見直す部分は、今後見直しを行うというこ
とでよいか。

（事務局） はい。

（会長） 大きな修正のご意見がなければ、本日ご審議いただいた計画の変更案を計画案として、先ほ
ど説明のあった 2 月議会に提出するという事でよいか。

（全委員） 反対意見なし

(2) 香川県のこどもを取り巻く現状について

(事務局) (香川県のこどもを取り巻く現状について、資料4に基づき説明。)

(会長) 計画策定に向け、まずどういった香川県にしていくか、そして、どのような計画を策定するか、この場でも議論する必要があると思う。本日は、子ども政策や少子化対策という大きな括りの中での課題、あるいは、香川県のこれからの5年間で目指していく方向性、子どもの幸せを実現するための要素やキーワード、これはこれから新しい計画の基本理念、基本目標となっていくのだが、それぞれの専門の各委員の皆さまからいろいろご意見等いただきたい。

最後に説明のあった、「みらいのわ かがわ」は、資料2の122ページにある「子ども等の意見を表明する機会の確保」のところに関連する内容ということでよいか。

(事務局) はい。

(委員) 資料4は、アンケート調査の結果などから、現状の課題が分かりやすくまとめられている。

特に、「高校3年生意識調査」で「結婚したいが、将来結婚しないと思う」と回答したその理由が、パートナーが見つからないと思うから、という結果は非常に残念だと思う。

計画における施策の観点から言うと、縁結びの事業をされているが、大人の方も、パートナーを探しているが見つからないという話もあるので、各市町とどう連携しているのか、その取組みについて教えてほしい。また、今後も継続していくのかについても教えてほしい。

(事務局) 平成28年に縁結び支援センターを立ち上げた当初から、市町の結婚支援を担当する部署、といっても当時はそういう部署はなかったので、政策部門の担当課と年に1回は必ず顔を合わせて話をする機会を設けており、国の補助金等の申請や、イベントの周知等においても、市町と連携している。県の縁結び支援センターは、この建物(香川県社会福祉総合センター)の1階にあるが、市町によっては、縁結び支援センターの出張所を置いていただいているところがあったり、県の県民センターでも、縁結び支援センターの広報などを行っている。

(会長) 最後に説明いただいた「みらいのわ かがわ」は、非常に素晴らしい。このような取組みも少しずつ実施していかないといけない。

(事務局) 「みらいのわ かがわ」は、学校に配り、先生方にも説明させていただきながら、進めているところである。

(会長) 「高校3年生意識調査」を受けて、高校生の本音などについて、どう考えられるか。

(委員) 高校生の本音はなかなか分かりにくいところがある。

(委員) 当医院では、中学生と大学生の実習を以前から積極的に受け入れている。外来見学のあと、必ず、子育て支援センターと病児保育室に入ってもらっているが、中学生、大学生は、子育て支援センターからなかなか帰ってこないのを見に行くと、その中に溶け込んで、和気あいあいと、保護者と話したり、赤ちゃんと遊んだりしている。また、病児保育室でも楽しそうにしている。他にも、学生が職員にインタビューをするのだが、「どうしてその職業についたのか」「その職業について楽しいか」「生活はどうか」など、細かい内容を具現化して聞く。また、保護者には、「どうして結婚したのか」「辛いことはないのか」などの質問をする。その答えを聞くと、結婚生活は何かいいみたいだと、皆安心した顔になる。私からは、彼らに医院での実習体験の感想を聞くのだが、否定的な声は聞かない。

子どもは、すぐそばにいる大人の影響を受けやすい。そういう意味で、実習生のこういう体験はすごく大事だと思う。また、そこから子どもの声を丁寧に聞いてあげることが必要で

ある。

産後ケアについてだが、昨年産後ケアを始めたが、産後は10～15%前後が産後うつになると言われており、産後数か月以内に発症し、好発時期は産後4週以内と言われている。お母さんと話をしているよく耳にするのは、子どもはかわいいが1人になりたい、という切実な思い。ニーズも多様化している。健診でも、赤ちゃんの成長や発達のことを話す、時間も短く、その中だけで全て話を聞くのは難しい。産後ケアのニーズ調査やアンケート調査、もう少し時間を経過した後に行うアンケート調査などで、現場の意見を聞いてほしい。

(会長) その中で、スキンシップ、触れ合うことが非常に重要だというご意見をいただいたが、実際に中学生等が子どもと触れ合うのは大切なことだと思う。

(委員) アンケート結果を見て思ったことだが、13ページ「妊娠出産」の項目で、「将来子どもを持つにあたり、障壁となる可能性が高いと思うもの」のところで、ほとんどの選択肢に「負担」ということばがついており、子育てをまだ分かっていない高校3年生に、子どもを育てることは「負担」なのだという気持ちを植え付けてしまうのではないかと、ということが気になった。

以前とある先生の「少子化を解決するには」という話を聞いた。夏休みには、子どもに昼ごはんを作るのが大変だとか、仕事を休まないといけないとか、子どもを育てることは負担であるというような報道がよくされているが、働いている保護者が増えているとはいえ、子育てが大変で負担だということばかりではなく、子育ては楽しいということをもっとPRすればよいと思う。また、不満を漏らすだけでなく、子育てを楽しむ保護者をもっと増えてほしいと思う。

(事務局) 「高校3年生意識調査」は、日本財団のアンケートと同じ設問にし、比較できるようにしている。委員がおっしゃるように、負担ということだけでなく、子育ては楽しいこともアピールすることを考えていきたい。

(委員) 話は変わるが、一昨日、とあるインキュベート施設で、なるほどと思ったことがあった。そこに来ている女子大学生から、「子育て支援に役立つアプリ開発をしたいと思っているが、自分たちが見ているSNSやインターネットでは、ネガティブな情報しか流れてこないの、私がポジティブなような事例を教えてほしい」と言われた。若い人たちが、アクセス数がものすごく多いもの（バズっているもの）を一度読んでしまうと、アルゴリズムで、そういったネガティブ情報ばかりが流れてくる。一方で、子育て中のお父さんお母さんたちは、よくほんわか動画を見たりするので、そういったものが流れてくるのだと思う。

若い独身の男女に、ネガティブな情報ばかりが流れてきていて、見えている景色が違ったら、すごく問題だと思う。そのようなところを分析しているデータがあればよいと思う。リアルな声を聞き、若者は見えている景色が違っているという現実を突きつけられ、大きなヒントをもらったように思った。

(事務局) ネット世代、スマホ世代は、同じ情報にさらされており、その情報をどう反転させていくかなどを含め、そういった分析データがあるのかどうか、私もこれから探していきたいと思う。

(会長) 大学生繋がりになるが、前回の会議の後、県の障害福祉課の紹介で、三光病院の海野先生を招いて、教育学部の1年生全員に、ネットゲーム依存とどうつき合っていくかについて、いろいろと話をしていただいた。いろんな情報があり、最後は、自分で判断するしかないのだが、どう付き合っていくかも含めて、学生自身が、自分で自分をコントロールする力をどう高めていくかというところが大きな課題である。

(委員) 世界各国の18歳の意識調査で、「家族や友達と、政治について普段から話をしているか」

「自分の行動で社会を変えていけると思うか」の設問に対し、他の国の若者は約 80 パーセントという高い結果に対し、日本の子どもたちは、最下位ということに大変ショックを受けた。

中学校、小学校でも、自主性をいかした事業が進められており、幼稚園や認定こども園も、自発性を大切にしたり、子どもたちが創り出す保育をしている。今回、県が実施した「高校 3 年生意識調査」などをみると、子どもたちの意見をよく聞き、それを県のいろいろな取組みに生かしていこうとしており、子どもたちが自分たちで社会を変えていけるという気持ちに繋がっていくのではないと思った。調査の選択肢に、ネガティブな表現が多いことは私も気になっており、アンケート調査は、なるべく肯定的にとらえられる項目であれば結婚や出産をうれしいこと、ととらえていくことに繋がり、よいと思った。

昨日、当園で児童文学作家の くすのきしげのり 氏にご講演いただいた。保護者の膝の上に、子どもたちを座らせて、楽しい読み聞かせの時間を過ごし、心に残る体験になった。その後、保護者対象の話の中には、子どもたちは、先生にも母親にも怒られ、行き場のない怒りを友達にあててしまうが、その気持ちを分かってもらい、ぎゅっとしてもらえたときに明るい気持ちで進んでいける、などの話があった。話を聞いた後顔が明るくなった保護者の方や、涙を拭いている方もいて、こういう機会があると子どもを愛おしく感じ、大変いいなと思った。

当園は、中学生の職場体験の受入れもしており、中学生が 1 冊ずつ読み聞かせをしている。その際「これは僕が幼稚園のときにすごく気に入っていた本だから、これを自分のクラスで読んであげよう」などいろんな想いで絵本を読んでいる。県でも保護者自身の心を癒やす読み聞かせを推進していただきたいと思う。

(委員) SNSを通じて具体が見えすぎている問題や、結婚や出産について夢も希望もないという子どももいるが、リアルな体験で上書きするしかないと思う。

子どものコミュニケーション力の低下について指摘されている。子どもを見ていると、インターネットやゲームなどが生活の中心となっており、コミュニケーション力が不足していると感じる。

高松市の中学校では、乳幼児ふれあい事業を通じて、赤ちゃんを抱っこして話しかけたり、お母さん方から子育ての楽しいことや大変なことを聞いたりする機会があり、そういった経験がコミュニケーション力の向上に生きてくるのではないと思う。

また、資料 4 の 16 ページに、「子育てに必要・重要だと思うこと」として、「子どもの就学に関わる費用の軽減」の回答が一番多かった。高等学校に進学するときにまとまったお金が必要で、貸付けや、奨学金などについて保護者と話をすることが多いのだが、経済的な差で選択肢が狭まってしまうというのが現状で、いつも心苦しく思っている。

(委員) 少し違う見方からだが、資料 2 の 20 ページの「育児をしながら働き続けるために必要だと思う常勤・制度」について、弾力的な勤務体系の導入が一番多く、次に延長保育などの多様な保育サービスの提供となっている。確かに、そういった要望が多いのはわかっているのだが、保育施設にも仕事をしている人がおり、保育施設で働く人が結婚して子どもができると、仕事がしづらくなっているという現状がある。

ここを充実させるということは、そこで働いている人たちは長時間労働を求められるし、それを防ぐために、人を入れるとなるが、人がいないのが現実である。このような状況で十分なサービスが提供できないのが実は現実だということも理解していただきたいのだが、岸田内閣のときに、異次元の子育て政策ということで、こども家庭庁ができ、そして今、こども

誰でも通園制度が始まろうとしている。この制度自体が悪いとは思わないが、実際にやってみると、子どもと親との関係がきちんと築けるのかどうか、もう少し親が子どもを見て、また保こ幼でも子どもを持った職員が働いている中で、子育ては楽しい、ということを保護者に伝えることができるかどうかだが、今の現実ではなかなか難しい。社会がこれからどんな風にならっていくか、例えば、ヨーロッパのように、仕事は4時に終わり、4時半には保育所に迎えに行けて、保育所の先生もその時間には皆帰るという、そういうシステムが本来構築されないとなかなか難しいと思っている。

(会長) 県や市町がそれぞれ施策を打っても、最終は、保護者と子どもの間での向き合い方というところになり、現実的にはなかなか難しいところはあるが、研修会や意識改革など、それをどう支援していくかを考えなければならない。

(委員) 学校現場の状況を少しお話させていただくが、先ほどは生徒の話であったが、今回は教員の話である。

小学校、中学校、高校どこを見ても、ここ10年ぐらいで学校現場は随分と変わった。何が変わったかというところ、ここ10年で、教員の採用数が本県では随分と増えた。20代30代は、10年前にもそれなりにはいたが、その多くは講師であった。講師だった人が教員に代わって行く中で、結婚し子どもをつくる。また、育児休業、特に男性育児休業を取得する教員が随分増え、当たり前の感覚に変わった。制度も充実し、母親、父親のどちらかしかとれなかったのが、今は同時に取れるようになっている。雇用を安定させ、制度を充実させることで、結婚、出産、育児というところに差が出るのではないかと感じる。

(会長) 育児休業制度については、大学の生徒の多くも大変興味関心を持っているが、それを使うことが権利だという感覚なので、権利が肥大化してしまわないかという懸念もあり、そのバランスが非常に難しいと感じている。

委員の話聞いて、誰もが働きやすい社会、そして子育てしやすい社会をつくっていくことは大変重要だと思った。

(委員) 昨年、高松市に引っ越してきて、印象としては、すごく子育てしやすいところだと感じている。地元でなくても、高松市に家を構える方も多い。都会から転勤で来ても、車があれどこにでも遊びに行けるし、駐車場代もかからない場合も多く、子育てしやすいと感じているようだ。

少子化、未婚化、晩婚化等について、さきほどSNSの話があったが、自分もSNSを見ると、不倫や子育てに消極的な夫の話など、マイナスの情報が溢れており、おそらく、幸せな家族の話より、そういう悪いネガティブな話題の方が興味をそそられる人が多いのだと思うが、メディアやアプリで流れてくるそういったネガティブな情報を若い学生も目にしていると思うと悲しく思う。

また、自分が20代の頃は、適齢期になると、周囲から、結婚は？とか、彼氏いるの？というような質問を日常的にされていたが、今はそのような話題はハラスメントになる風潮があり、親や親戚でさえも話題にしにくい状況にある。

「高校3年生意識調査」の結果については、男女の交流の機会は、大学生になっても、就職しても増えていくので、個人的にはあまり気にしなくてもよいと思うが、高校、大学の授業や学生が見るメディアなどで、子どもを育てるには夫婦の協力がいるということなどを、もっとアピールしていけば、仕事を諦めなくてもよいなど、選択肢が増えていき、子どもが

欲しいという気持ちになれるのではないかと思います。

(委員) 資料4のデータは、深いところまで踏み込んでいる。

1月15日に、知事にも出席していただき、香川働き方改革推進会議を開催したが、知事からも少子化が課題だと言われた。経済団体からは、活力のある企業、働きがいのある企業、住んでみたくなる香川県、について報告した。その中で、商工会の篠原会長がえんむすびの話をし、観音寺市と三豊市で、昨年12月、クリスマスイベントの前にやってみたのだが、予想外にエントリーがあった。前回開催した際の女性へのアンケートで、男性の服装がよろしくないという意見が多くあったため、イベントの前に、コーディネーターに来てもらい、男性の身だしなみを整えてもらった。それもあってか、意外にも成約率が高かったとのこと。おせっかいな取組みかも知れないが、有効であると思った次第。

また、資料4のデータについては、13ページの「子どもを持つと障壁となる可能性が高い」のところで、金銭的な負担をあげている人が多い結果となっている。これから2～3月にかけて春季労使交渉が始まるが、初任給をあげて、新卒採用をしようとする、35歳前後の、家庭を持って子どももいる方の不満がかなり高まってくるため、初任給だけではなく、生活費がかなりかかってくる年齢のところまで、賃金カーブを引き上げていくべきだという話をしている。

4ページにある年齢別・性別_社会増減については、従来から20代の女性の転出が多い。とある県の調査によると、その県の女性の大学進学率がかなり上がってきており、大学生活で知識、技能、人脈、経験を積んで、いざ就職しようとしたとき、経験を活かせる企業が地元にはないため、地元に戻ってこないという意見が多かったとの報告がされている。香川県では、きらりひかる企業は多く、情報発信をするなどして、香川県にも良い企業があることを見せていこうという取組みもやっていきたい。

(会長) 社会全体で、それぞれができることをつなげていき、連携していくことは大事なことである。

(委員) 資料4の16ページ「子育てに必要・重要だと思うこと」で、「子どもや生活のことなど、悩みごとを相談できること」についてだが、計画(案)91ページにもあるが、「いじめ、不登校の防止や相談体制の充実」で、同じ悩みをもつ保護者同士が悩みごとを相談する場所があれば良いと思う。

(委員) 資料4のアンケート結果は非常に興味深かった。17ページの生活満足度のところで、悩みを吐き出すところがないという現状が見える。自分の状況をよく分かってくれて、同じ悩みを抱える人と話せる場をもう少し充実させ、子どもやその保護者にそういった場があることを周知すれば、満足度が増すのではないかと思います。

また、先ほども委員からご意見のあった13ページにある「将来、子どもを持つにあたっての負担」については、どうしたらよいかを自分たちで考えさせるようにすると、おもしろいデータが得られるかもしれないと思った。また、結婚するにも、子育てするにも、小さい頃からのコミュニケーション能力が重要だと思うので、そういう能力が充実すれば、いろんな場面で、その人自身がその人らしく人間関係を構築できるようになり、ひいては結婚にもつながるのではないかと思います。

(委員) これまで保育園、こども園では、中学生の職業体験を受け入れている。10数年前までは、ひと月100名ぐらい来ていたが、少子化の影響で、最近は10分の1くらいになっている。2日間で10人、合計20人ほどの中学生が体験に来ており、なぜ保育園を選んだかを聞くと、「子

どもと遊びたい」とか「かわいいから触れ合いたい」と答える。逆に、保育士に対しては、「大変だと思うことはないですか」と聞くのだが、その際、しんどい、というようなことは言わずに、保育をすることで、毎日子どもの成長が見えて楽しい、と答えるようにしている。

どこの保育園、こども園でも同じだと思うが、子どもたちには、善悪についてだけでなく、自分が思っていることをちゃんと発言し、自分で考える力をつける、そういったことに重きを置いている。例えば、今朝、何を食べたかを尋ねたときに、順番に、おにぎり、パン、おにぎりが続くと、自分が体験していないことでも隣の子が言ったことをそのまま同じように言ってしまうような子が増えているので、自分の思うことはきちんと発言しようということを子どもには伝えている。

資料4の17ページに関連して、子どもの居場所づくりは私たちがもっと真剣に考えていかなければならないと思っている。また、当園では、出産経験や、子どもを育てた経験のない人が、実際に保育室で体験できたり、これから母親になる人が、オムツの交換や衣服の着せ方などを学べたりする場を提供している。

(会長) 自分で発言したり、自分で考えたりする力は、いろんなところに波及していくので、社会全体でも考えていく必要がある。

(委員) 参考資料3にある、子ども・若者委員について、社会福祉協議会において策定している地域福祉活動計画がある。数年前に、子どもの意見を取り入れようという話になり、中学生や高校生に委員になってもらい、地区ごとに座談会形式で、中学生や高校生にも参加してもらい意見を聴いた。

122ページに記載のある「子ども等の意見聴取の取組み」についても、大学生を募るということになっているようだが、難しいかもしれないが、可能であれば高校生や中学生も入れていただきたい。

(委員) 先日の成人式で、「高松に戻ってきたい」「高松に住みたい」という若者はたくさんいるが、一方で、希望する就職先がないので、高松は好きだが県外に出て行ってしまう。医療福祉の現場では、本当に深刻な人手不足が長く続いている。少子化ということもあり、若いスタッフたちが大変な状況にある。少しでも早く少子化の解消に向けて取り組んでいただき、医療福祉に従事している人たちが少しでも幸せを感じられるようにしてほしい。そして高校生、大学生から、未来に向けての声を聴けるようにしてほしい。

(委員) 来年度1年かけて計画を作っていくということだが、先ほどのデータ解説が非常に興味深かったのは、一同同じだと思う。企業の方が見ても、学生が見ても、非常に興味深いものとなっていて、我がごととして、我が子、自分の将来を考えるきっかけになると思う。例えば、子ども・子育てを考える、考えリーダーのような人、例えば企業さんからオーダーがあれば、1ヶ月に1回ぐらい、ボランティアで身近なところに行って、この解説をしていただければどうか。つまり、教えるというよりは事実を伝えて、自分たちで考えたり、グループで話をしてもらい、というようなことを展開していくことで、計画を読んだことがある県民は99%いないが、こういう計画をつくっているということを知っている人を1割くらいにする。計画策定を、県の人がしてくれることとするのではなく、自分たちが考えて動くことで、計画が身近なものになればよいと思った。

(会長) これをきっかけに、それぞれの委員の皆さまがそれぞれの立場で、話題を広げていただき、自分ごととしてとらえ、考えるきっかけとしていただきたい。

(委員) 「高校3年生意識調査」では、パートナーがいなかったか、できないということで、結婚したいと思わない若者も一定数いる。紹介などで知り合い、パートナーが見つからなかったら、結局最後は婚活パーティにいきつくが、婚活パーティは最後のとりでのような印象があり、若者は、存在を知っていてもそこに行くのは敷居が高いというか、抵抗がある方もいると思う。婚活パーティを、若いうちから相手を見つける選択肢の1つとして認識してもらい、そこからいろんな選択肢の中で、パートナーを見つけていくということを、ハラスメントにならない程度で、若い人たちに伝えていくことも大事だと思う。

(委員) 私ごとではあるが、4人の子どもがおり、ようやく子育てが終わろうとしている。この30年間、戦争のような日々もあり、金銭的にも大変なこともあったが、終わろうとしている今考えると、寂しさというか、子どものおかげでいろんな経験をさせてもらったし、もっともっと子育てが続いたらいいな、と思っているぐらいである。

先ほど委員からも、ネガティブな意見がたくさん流れてくるという話もあったが、生の声を聞く機会を設ける取組みなども、ぜひしたらよいと思う。次は孫育てを頑張っていきたいと思っている。

(会長) 先ほど事務局の話の中で、「未来のわかがわ」が1000件を超えて集まっているということで、その声をどう分析して、どう反映させていくか、我々も考えていく必要がある。各委員の皆さまが、これを話題にしながら、情報収集したり、アイデアをいただいたり、次の新計画に反映させていくこともできるのではないかなと思う。

本日、委員の皆さまからいただいたご意見を計画に反映し、実現するためにも、資料2の計画(案)29ページ下側に、「そのためには、家庭、保育所、幼稚園、認定こども園、学校、地域、企業、行政、その他の社会のあらゆる分野におけるすべての構成員が、少子化と子ども・子育て支援を自らの問題と捉え、それぞれの役割を自覚し、行動することが大切です」とあるので、できることから、小さな一歩でも、まずそれを一緒に考え、行動する。そして、30ページの基本目標、特に基本的視点である2「父母などの保護者が子育てに対し責任を持ち、子育てする力を発揮できる子育て支援に取り組む」、また、3「次代を担う子どもと子育て家庭を社会全体で支援するよう取り組む」を中心に、今日いただいた意見を、次回につなげて、新計画を策定していきたいと思う。

それでは以上で予定していた議事は終了となるが、その他として事務局から何かあるか。

(事務局) 先ほど委員からお話をいただいた新しい若者委員については、公募による募集を考えている。次回の会議は、新しい委員にもご参加いただき、5月中旬以降に開催したいと考えているので、スケジュールを調整いただき、皆さまにご出席いただきたい。

(会長) 以上で、本日の会議を終了する。

以 上